

Title	アリストテレスの「付带的感覚」に関する一解釈
Sub Title	An interpretation on Aristotle's concept of incidental perception
Author	堀江, 聡(Horie, Satoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1986
Jtitle	哲學 No.82 (1986. 5) ,p.47- 75
JaLC DOI	
Abstract	In De Anima B6, Aristotle divides objects of perception into essential and incidental ones. Furthermore, he divides objects of incidental perception into three kinds. (1) common objects, (2) proper objects of heterogeneous perception, and (3) objects such as "son of Diaries". Many Commentators think that the latter two are irrelevant to Aristotle's theory of perception. I think, however, these kinds of perception play the most important part not only in recognizing the existence of individual objects, but also explaining animal behaviors. By analyzing De Anima B6 and Γ1, I propose three levels of incidental perception: 1) Five proper senses perceive incidentally common objects. 2) Each proper sense perceives incidentally objects of proper senses other than itself. 3) Common sense and proper senses perceive incidentally objects such as "son of Diaries".
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000082-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アリストテレスの「付带的感覚」
に関する一解釈

堀 江 聡*

An Interpretation on Aristotle's Concept
of Incidental Perception

Satoshi Horie

In *De Anima* B 6, Aristotle divides objects of perception into essential and incidental ones. Furthermore, he divides objects of incidental perception into three kinds.

(1) common objects, (2) proper objects of heterogeneous perception, and (3) objects such as “son of Diates”.

Many Commentators think that the latter two are irrelevant to Aristotle's theory of perception. I think, however, these kinds of perception play the most important part not only in recognizing the existence of individual objects, but also explaining animal behaviors.

By analyzing *De Anima* B 6 and *I* 1, I propose three levels of incidental perception:

- 1) Five proper senses perceive incidentally common objects.
- 2) Each proper sense perceives incidentally objects of proper senses other than itself.
- 3) Common sense and proper senses perceive incidentally objects such as “son of Diates”.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程 (哲学)

アリストテレスの感覚論の解明が、彼のプラトン批判の基盤を理解する上でも、後世の経験主義及び客観主義の原型を、彼のうちに探る上でも重要であることは、贅言を要しないであろう。*Metaphysica* の劈頭或いは *Analytica* の掉尾を飾る、感覚から表象、記憶、経験を経て技術、学知へと生成する知の発生論的記述を読むならば、アリストテレスの存在論そのものを理解する上でも、彼の感覚論への通暁が必須のものであることが首肯されよう。

アリストテレスの認識理論全体の中で、知の発生の端初である感覚の果す役割が具体的に如何なるものなのかを知るためには、まず彼の感覚論が主に展開されている *De Anima* において、その感覚論の基本的概念枠組を十分に理解しておく必要がある。ところが、それについて諸家の解釈は混乱し、未だ定説はないと言ってよい。そこで我々は本論の第一節で、*De Anima* B 卷6章を分析することにより、感覚論全体の骨格を形成する最も基本的な概念と我々が見做す「自体性・付帯性」の意味を確定する。そして第二節で、I 卷1章の難解な箇所 (425 a 20-b 11) の最も整合的な読み方を提案し、その結果として「付带的感覚対象」を三種に区分する。第三節では、本来的な付带的感覚対象の持つ哲学的意味を探り、アリストテレスの説く知の成立過程における感覚論の位置づけを行ないたい。

I

アリストテレスは、*De Anima* B 6 で感覚対象の分析に着手する。それは予め示された原則に準拠してのことである (415 a 16-21⁽¹⁾)。つまり第一に、可能態よりも現実態の方が定義の上で (*κατὰ τὸν λόγον*) 先であるから、感覚能力の本質を探究するためには、現実態における感覚活動の本質を先に把握していなければならない。というのは、能力を能力として定義するには、それが現実⁽¹⁾に或る活動ができるものであるとする以外、我々にとって方法が存しないが故に、可能態にあるものについての定義は、現

実態にあるものの定義を必然的に含んでいなければならないからである。⁽²⁾
 第二に、現実態における感覚活動を定義するためには、その感覚活動の相
 関者 ($\tau\acute{\alpha}$ ἀντικείμενα) が先に把握されていなければならない。というのも感覚
 とは、客観的な対象によって作用を受け、対象に形相上同化されることを
 俟って初めて成立するものだからである (416 b 33-34, 418 a 5-6)。

まず感覚対象は、自体的感覚対象と付带的感覚対象とに区分され、更に
 自体的感覚対象は、固有対象 ($\dot{\iota}\delta\iota\alpha$) と共通対象 ($\kappa\omicron\iota\upsilon\acute{\alpha}$) とに細分される。
 固有対象とは、五感即ち視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚によって感覚され
 るものであり、それぞれ色、音、味、匂い、冷乾温湿などである。⁽³⁾ 或る対
 象が「固有である」という意味は、その対象が他ならぬまさに或る特定の
 感覚能力だけによって感覚され、その対象をその感覚能力は感覚し誤るこ
 とがないということである。

次に共通対象とは、運動、静止、数、形、大きさというように、少なく
 とも二つ以上の固有感覚によって感覚されるものことである。⁽⁴⁾ たとえば
 形は、視覚と触覚の二つの固有感覚によって感覚される。

以上の固有対象と共通対象は、共に自体的感覚対象に含まれるが、
 $\kappa\alpha\theta'\alpha\upsilon\tau\acute{o}$, $\kappa\alpha\tau\grave{\alpha}$ συμβεβηκός の訳語をめぐる諸家の間に見解の相異があ
 る。ヘット、ブロック、ヒックスはその訳語として、「直接的 (directly),
 間接的 (indirectly)」を当て、認識論的見地から使用されたものと解して
 いる。⁽⁵⁾ しかし、共通対象が共通感覚によって自体的に感覚されると語られ
 るとき (425 a 27-28), 既に五感を経由している共通対象が、共通感覚に
 よって直接的に感覚されると置き換えて語る事がどうしてできようか。
 そこで我々は、ハムリン及びキャッシュドラーと同様、他の著作を通じて
 アリストテレスが一般に用いるテクニカル・タームとしての自体的 (in
 itself), 付带的 (incidentally) という訳語を当てることにする。⁽⁶⁾

アリストテレスの哲学用語集として知られる *Metaphysica* 4 卷の 18 章
 では、自体性の異なる意味が列挙されているが、その中に次のような文章

がある。

「また或る一つの意味では、「何であるか」のうちに含まれているものが「自体的なもの」である。たとえば、カリアスは自体的に動物である。というのは、彼の定義のうちに「動物」が含まれるからである。即ち、カリアスは或る動物だからである。⁽⁷⁾」

ここでは定義上の自体性が問題になっており、何であれ或るものを定義する際に、必然的に言及せねばならないものが自体的なものだとされている。この自体性を当面の我々の課題である感覚と感覚対象の場合に適用してみよう。つまり、或る感覚対象が或る感覚能力にとって自体的と語られるのは、その能力を定義する際、その対象が言及されねばならないということであり、他方付带的とされるのは、その感覚能力の定義のうちにその対象が言及される必要がないということである。たとえば「視覚とは色を感覚する能力である」というように、必然的に色が視覚の定義に含まれるならば、色は視覚の自体的対象である。⁽⁸⁾

ただしハムリンは、逆に感覚対象を定義する際にも、それを感覚する能力に言及する必要があると主張するが、事實はソラブジの指摘通り（もっともソラブジはその理由に触れていないが）、色、音、匂いなどの定義のうちに、各々に対応する感覚は内含されていないのである。⁽⁹⁾ その理由は、感覚が感覚対象に対して持つ関係は、半分に対するその二倍であるとか、熱くされるものに対する熱くするものの如くに相関的な関係ではなく、非相関的な関係であるからである。何故なら感覚と感覚対象の関係は、感覚の方が「それが他のもの（対象）に対してあるところのもの」であるのに、対象の方は「他のもの（感覚）がそれに対してあるところのもの」であることによって成立しているからである。⁽¹⁰⁾ つまり感覚は対象の存在を前提するが、対象の存在は感覚の存在を前提しないとされているからである。⁽¹¹⁾

以上のような意味で、自体性を定義項と被定義項の必然的連関の意味で

解すべきことは、感覚対象が自体性・付帯性の観点から区分された B6 のすぐ後に接続する B7 において暗示されているように見える。

「さて視覚がそれについてであるところのもの〔視覚の対象〕は見られるものである。そして見られるものとは、色……である。しかし色は、自体的に見られるものの上にあるものである。もっとも〔ここで私が〕「自体的に」と言うのは、定義上のことではなく、自らのうちに見られることの原因を持っている、ということである (418 a 26-31).」

この文脈で「自体的に見られるもの」は当然物体の表面つまり色の基体を指すであろう⁽¹²⁾。しかるに B6 の論述に従えば、視覚にとって自体的に見られるものとは、色でなければならない。そこでアリストテレスは「自体的に見られるもの」という言葉を、B6 の「定義上」という意味とは違う意味で用いていることに注意を喚起せんがために付記したのだと解釈できる⁽¹³⁾。

そもそもアリストテレスは、B1 で植物、動物、人間の靈魂に共通な定義 (*λόγος κοινός*, 414 b 23) の探究から出発した。ところで、共通定義は全ての靈魂に適合するが、植物、動物、人間のいずれにも固有な定義とならないものである故、B4 では植物に固有な能力である栄養的靈魂の「何であるか」が問われ、B5 からは動物に固有な能力である感覺的靈魂の「何であるか」の考察が開始される。従って B1 からの筋の流れからすれば、定義上での自体性が問題となるのは蓋し当然であろう。

それでは、次に付帯的感覚対象とはどういうものか整理してみよう。アリストテレスの以下の言葉について、最近諸家によって論争が行なわれた。

「たとえば、白 (いもの)⁽¹⁴⁾ がディアレースの息子である場合の、ディアレースの息子のようなものが、付帯的感覚対象と語られる。何故視覚がディアレースの息子を付帯的に感覚するかと言えば、視覚が〔付帯的に〕感覚するところのそれ〔ディアレースの息子〕は、白いものに付帯しているか

らである。それ故、このようなものである限り、その感覚対象からは、視覚は何らの作用も受けないのである。」

κατὰ συμβεβηκός δὲ λέγεται αἰσθητόν, οἷον εἰ τὸ λευκὸν εἶη Διάρου
υἱός· κατὰ συμβεβηκός γὰρ τούτου αἰσθάνεται, ὅτι τῷ λευκῷ συμβέβηκε
τοῦτο οὐ αἰσθάνεται· διὸ καὶ οὐδὲν πάσχει ἢ τοιοῦτον ὑπὸ τοῦ αἰσθητοῦ.
(418 a 20-24)

この箇所をめぐってテキスト上の論争点は、418 a 23 の関係代名詞 *οὗ* を a 22 の *τῷ λευκῷ* にかけて読むか (以後 A 説とする)、直前にある *τοῦτο* にかけて読むか (B 説とする) ということと、a 23 の *τοιοῦτον* を白いものと解するか (C 説とする)、ディアレースの息子と解するか (D 説とする) ということの二点である。もし B 説が正しければ、我々はディアレースの息子を感覚できることになる。しかし、たとえ白いものを人が感覚することはあっても、ディアレースの息子である限りのディアレースの息子を感覚するとは決して言えない (D 説を選択) という理由で、ロス⁽¹⁵⁾ はテミスティウスを援用して B 説を退け、A 説を提案する (A—D)。しかしハムリンとグレーザーは、A 説は文法的に無理があり、構文論的見地から退けられるべきだと主張する⁽¹⁶⁾。またロス説 (A 説) はディアレースの息子が視覚によって感覚されるのは不可能であるということとその根拠にしているが、アリストテレス自身「ディアレースの息子は付带的に感覚される」と語っているのだから、ロス説には賛同でき兼ねる。ところが A 説を退け B 説を採用すると、最後の文の直前で「感覚されるディアレースの息子」と語られたのだから、推論の流れから言えば当然 C 説を採らざるを得なくなる。即ち「それ故、また白いものである限りの感覚対象によっては何ら作用を受けない」という訳になる。キャッシュドラーはこの解釈 (B—C) を採り、「アリストテレスは、固有対象それ自体が付带的感覚対象にならないと語っているに過ぎない」と述べる⁽¹⁷⁾。この説が文法的に見て

も、推論の流れから見ても、ロスの A—D 説よりも首尾一貫しているが、そうすると今度はこの種の付帯的感覚に一種の固有感覚の地位を与えることになるから、キャッシュドラー説には与し得ないとグレーザーは批判する。⁽¹⁸⁾ それでは、グレーザーの妥協案は何か。彼はシンタクスを重視してロスの A 説を退け、B 説を採り、他方論理の一貫性の方は犠牲にして D 説を採る (B—D)。しかしながら、我々はグレーザーと同様、B—D 解釈を採るけれども、これが首尾一貫していないとは思わない。というのは、a23 の *τοῦτο οὐ αἰσθάνεται* (感覚されるディアレースの息子) は、自体的にと、付帯的にと限定されていないからである。もし「ディアレースの息子が自体的に感覚される」とするならば、すぐ直後で「ディアレースの息子によって作用を受けるのだから、白いものである限りの感覚対象によっては全く作用を受けないというキャッシュドラーの不合理な結論になる。しかし「付帯的に感覚されるディアレースの息子」というように、「付帯的に」を補って読むならば、まさに「付帯的に」であるが故に「ディアレースの息子である限りの感覚対象によっては全く作用を受けない」という整合的な結論が得られる。⁽¹⁹⁾ アリストテレスは、既に a21-22 で「ディアレースの息子は付帯的に感覚される」と語ったので、すぐ直後の同一文中で「付帯的」という限定句を繰り返さなかつただけだと思われる。⁽²⁰⁾

この箇所を通じて確認しておくべきことは、視覚にとって白いものの感覚は現実態として生ずるが、ディアレースの息子の感覚は、白いものの感覚に付帯的であるが故に、視覚にとって全く生じない (*οὐδέν*) と強く否定されていることである。従って、或る感覚能力にとって或る対象が付帯的であるということは、その感覚能力がその対象を全く感覚しない、ということを含意すると見做してよいだろう。しかし、その対象が別の感覚能力によって感覚される可能性は排除されるわけではない。

それでは、付帯的感覚の実質的内容について、我々の解釈から最も離れた位置にいるハムリンの解釈をまず検討することにしたい。論争点は、ア

リストテレスが「ディアレースの息子は付帯的に感覚される」と語ったとき、この付帯性は何を意味しているのかということである。ハムリンは付帯性をその最もトリヴィアルな意味で解する。即ち、人は白いものを見ることはできても、ディアレースの息子を視覚によって見ることはできないのだから、白いものがたまたまディアレースの息子であった場合に、人は辛うじて付帯的にディアレースの息子を見ていると語ることが、もしアリストテレスがそういう言語使用法を定めるならば許されるというのである。つまり我々は、後になってその白いものが実はディアレースの息子であったのだと気づくことはあるかもしれないが、その白いものを見ていた時点においては、それをディアレースの息子として見ていないのだというのがその解釈である⁽²¹⁾。しかし、この解釈はハムリン自身も認め、キャッシュドラーによって批判されているように、Γ 3, 428 b 19-30 の記述と両立しない⁽²²⁾。そこでは、共通対象及び固有対象についての感覚におけると同様、付帯的感覚にも真偽が語られうるということと、それぞれの現実態の感覚から三種類の異なった運動が生ずることが語られている。従ってまず第一に、もしハムリンの説く如くトリヴィアルな意味で付帯的感覚を解するとすれば、その場合には偽が生じ得ないはずである。また、ハムリン的な付帯的感覚によっては人は受動しないはずなのに、ここでは明らかに付帯的感覚の際の受動が語られ、他の二種の感覚対象と同様、付帯的感覚対象も正真正銘感覚されるものであることが認められている⁽²³⁾。更に B6 で三種の感覚対象の一つとしてわざわざ言及されていたという事実そのものが、ハムリン流の付帯性解釈を困難にするとと思われる。

そもそもこのような誤解が生ずるのは、「ディアレースの息子」という表現が実体を表わすと即断したこともさることながら、B6 の解釈において、古註以来重点の置き方にずれがあるからではないだろうか。つまり、最初に感覚対象が自体的と付帯的とに分けられ、次に自体的感覚対象の中で更に固有対象と共通対象とに分割されたことから、第一次分割の結果で

ある自体的感覚対象と付带的感覚対象の区分こそがこの章の主眼だと解され、付带的感覚は実体を把捉するものとして考察の対象領域から切り離されてしまったのである。⁽²⁴⁾ そうすれば、結局付带的感覚は感覚論にとって余計者扱いされ、歴史の闇に葬り去られてしまう。我々が提案したいのは、B 7 から B 11 で五感各々の分析が実行されようとするとき、その分析にとって必要なのは五感各々に固有な対象だけなのであるから、B 6 末尾の「自体的感覚対象のうちでは、固有対象が勝義的な感覚対象であり、各々の感覚〔五感〕の本質は、本来的にこの対象に適合している (418 a 25-25)」との言明を最重要のものに見做し、この章からは何よりもまず固有対象と、その他の感覚対象との区分を読み取るべきだということである。他の感覚対象とは、共通対象とディアレースの息子型対象のことであるが、これら両者が一括して付带的感覚対象に含まれる視座が、次節で見るように Γ 1 で呈示される。五感それぞれを定義する際に固有対象を言及する必然性はあるが、共通対象を言及する必要はない。従って、前述の自体性についての我々の分析が正しいとすれば、共通対象は付带的感覚対象のうちに含まれるべきものであろう。それにも拘らず、B 6 で共通対象が自体的感覚対象のうちに含まれていたとすれば、それはアリステレスが Γ 1 で措定される共通感覚の存在を見越してのことだとする他なかるう。即ち共通対象は、共通感覚の定義の際、必然的に言及されねばならない故に、B 6 では先取りした形で自体的感覚対象のうちに含まれていたのだと見做すことである。⁽²⁵⁾

ここで *De Anima* の感覚論における自体性・付帯性の概念を整理しておこう。まず感覚対象には、1) 付带的にも感覚されないものがある。たとえば、もし異種の固有感覚が一なる根源的感覚に統合されていない場合 (*ἡ αὐταί*, 425 a 31), 固有対象は、異種の固有感覚によって付带的にさえ感覚されることができない。具体的に言えば、もし視覚と味覚とが一なる根源的感覚のもとで統合されていないならば、視覚は付带的にたりとも

白いものを甘いと感じできない。さもなければ、私が「白」と感じし、別の人間である君が「甘」と感じた場合にも、或るものが白く且つ甘いと私によって感覺される、という不合理なことにもなるから (cf. 426 b 19-20).

2) 自体的に感覺されるものの場合、その対象を相関者とする感覺能力が当然自明である必要があるが、ひとたびその対象を自体的に感覺する能力が明らかになった以上、その感覺能力より高次の感覺能力にとって、それが自体的か付帯的かと問うべきではない。たとえば、色は視覚にとって既に自体的対象であるから、更に色は共通感覺にとって自体的か付帯的かと問うことは意味を成さない。というのも共通感覺とは、形、大きさなどを自体的に感覺するものであって、形、大きさなどの感覺の際、色の感覺はその前提条件になっていると言う他なく、もはや色は共通感覺にとって自体的か付帯的かと問う必要がないからである。何故なら、或る対象が自体的に或る感覺能力によって感覺されるということは、その対象を相関者とする感覺能力が何であるかを求める探究がそこで停止してよいということだからである。従って、人は共通感覺を定義する際、形、大きさなど共通対象には言及する必要があるが、形、大きさなどの感覺の前提条件となる色などの固有対象については、色は共通感覺にとって自体的でも付帯的でもないので、言及する必要がない。

3) 付帯的に感覺されるものとは、しばしば誤解されるように、全く感覺されないものことではない。というのも全く感覺されないものは、付帯的に感覺されるとも語られる必要がないからである。⁽²⁶⁾ 従って、或る感覺によって付帯的に感覺される対象は、その感覺によっては全く感覺されないが、より高次の感覺によって自体的に感覺される必要がある（さもなければ付帯的感觉に虚偽の可能性があると語られなかったであろう）ので、付帯的感觉対象とは、必然的に自体的感覺対象へと転ずることを要求するものである、と定式化できるだろう。逆に言えば、或る対象が或る感覺能力

にとって付带的であるならば、その対象は、認識者のうちで、その感覚能力の背後に、もっと高次の、その対象を自体的に感覚する能力を必然的に要請することになる。というのも「思惟対象も、抽象において言われるものも、また感覚対象の状態 (*εἶσις*) や様態 (*πάθη*) である限りのものも全て、感覚される形相に内在する。そしてそれ故に、人が何も感覚しないなら、何も学ぶことはないし、理解することもないだろう (432 a 5-8)」という、アリストテレスの経験主義的思想からすれば、全ての認識が固有感覚経験のうち潜在的に含まれていることは当然だろうからである。低次の感覚能力しか持たない動物にとっては、無限の奥行きと豊富な内容を潜在的に秘めた対象のうち、固有対象を顕在化せしめることしかできないかもしれないが、人間ならば固有対象に加えて共通対象は言うに及ばず、知的形相をも顕在化せしめるであろう。言い換えると、人間は共通対象も知的形相も自体的に認識する能力を持っているということである。アリストテレスは、自体性・付帯性の概念で以てその感覚論に確乎とした構造を付与し、潜在的に全ての認識が与えられている感覚経験から、ヒエラルキーを成す諸感覚能力のレベルに応じて、次々に高度な認識が紡ぎ出され顕在化されるという経験主義を基礎づけたかったのかもしれない。

II

Γ1 でアリストテレスは、五感以外に固有感覚も固有感覚器官も存在し得ないことの証明を試みているが、その際共通対象が各々の固有感覚によって付带的に感覚されると語っている (425 a 14-15)。この言明は、共通対象を自体的感覚対象のうち数え挙げた B6 の記述と一見矛盾する。この矛盾解消のためトルストリックは、トマスが参照したラテン語訳に従って、*κατὰ συμβεβηκός* の前に否定の *οὐ* を挿入し辻褄を合わせようとする⁽²⁷⁾。またタイラー、ロディエ、カーン、クラーク、古註は全て、a 15 *αἰσθανόμεθα* を *αἰσθανόμεθ' ἄν* 或いは *ἄν ἡσθάνοντο* という非現実話法に直して

解釈しようとする。⁽²⁸⁾ というのも「共通対象が付带的に感覚される」という文は、否定される仮定の中でのことにすれば、共通対象が自体的に感覚されるという B6 のテーゼは安泰に保たれると言うのである。他方ヒックス、ドゥ・コルト、ロス、ハムリン、グレーザーは付帯性に段階を設けて、共通対象は固有感覚によっては付带的にだが、共通感覚によって自体的に感覚されると解釈する。⁽²⁹⁾

我々は、原典尊重の立場から後者の説を支持する。というのは第一に、もし共通対象が固有感覚によって自体的に感覚されるとすれば、共通対象は固有感覚と共通感覚の双方によって自体的に感覚されることになり、共通感覚の存在理由が消失してしまうからである。⁽³⁰⁾ 第二に、我々が先に述べたように、B6 で共通対象は固有感覚にとって自体的、と明言されていたのではなく、Γ1 の論述を予想して共通感覚にとってという意味で自体感覚対象に含められていたと推察されるからである。第三に、固有対象と共通対象という二種の対象の範疇上の身分の大きな異なりが、それらを一括して固有感覚の自体的対象に含めることの障害になると思われるからである。以下第三の理由について説明したい。

まず、固有対象についての感覚は常に真である (418 a 12, 427 b 12; *De Sensu*. 4. 442 b 8-9 et passim)⁽³¹⁾ のに対して、共通対象についての感覚は最も虚偽に陥り易いという相違が語られている (428 b 24-25)。それは何故か。⁽³²⁾ 固有対象である色、音、匂いなどは全て性質範疇に属し、⁽³³⁾ 形、大きさ、数といった共通対象は全て分量範疇に属している。諸性質の特徴は、まず種において反対 (*ἐναντιότης*) を持ち、本来的に不連続であることに存する。⁽³⁴⁾ 「感覚対象には全て反対がある。たとえば、色においては黒に対して白があり、味においては甘さに対して苦さがある。」⁽³⁵⁾ そして色における黒と白、味における甘さと苦さは両極 (*ἑσχατα*) を成していて、その中間にある色や味の種 (*εἶδη*) は数が限られている。⁽³⁶⁾ それに対して、分量の方は反対を持たない。たとえば多角形のいずれに対しても円は反対でないし、

四ペーキュスや面に反対のものは何もないからである。⁽³⁷⁾ 従って分量は両極を有さず、限定された種を持たないから無限の多様性を持つことになる。⁽³⁸⁾ それ故、種として限定された性質はほとんど常に正しく感覚されるのに対して、足がかりとなる限定された種が存しない故に無限の多様性を許す分量の感覚は、最大限に誤るものとなるろう。

更にもの一つ指摘すべきことは、「中間のものが判別できるもの (424 a 6) である故に、感覚能力 (器官) とは、感覚対象における反対 (*ἐναντιώσις*) のいわば何か中間 (*μεσότης*) のようなものである (424 a 4-5)」という立言は、もっぱら五感の対象である性質だけに向けられているのではないかということである。というのも、分量には反対は存在しなかったからである。従って、分量の感覚に関して五感は判定者になり得ないことを、それは暗示していると思われる。

さて以上のようにして、固有対象と共通対象の真偽発生の相違が両者の範疇の相違から由来するとすれば、五感が固有対象も共通対象も共に自体的に感覚するという説が退けられねばならぬ理由が首肯されよう。原則として、その特質が極端に異なった対象の感覚は、異なった感覚能力の管轄に委ねらるべきだろうからである。

こうして共通対象が五感を通じて付帯的に感覚されるとすれば、次の問題は、それは「ディアレースの息子」型付帯的感覚対象とどう区別されるかということである。Γ1 では共通対象もディアレースの息子型対象も付帯的対象として扱われるので、その2つの付帯性にレベルの差を設けるために、共通対象を自体的に感覚するものとして共通感覚が導入される。従ってこの共通感覚は、「アリストテレスの共通感覚」の名で後世一般に理解されている能力、即ち時間も感覚し、表象能力も含み、感覚の反省作用を行ない、異種の固有感覚対象の比較をも遂行する能力とは明らかに異なっている。むしろこのような種々の働きを遂行する能力は、*Parva Naturalia* で「全てのものを感覚する能力」⁽³⁹⁾、「第一の感覚能力」⁽⁴⁰⁾、「根源 (原

(41)理)」、「全ての感覚に付随する共通能力」などと呼ばれているものである。後世の解釈は、共通感覚と共通能力を取り違えている。両者を区別すべき理由は以下の通りである。即ち、共通感覚は形、大きさ、運動など共通対象を自体的に感覚するために導入されたものであるから、ディアレースの息子型対象はこの共通感覚によって付帯的に感覚されるに過ぎない。しかるに、もし共通感覚と共通能力が同一視されたならば、ディアレースの息子型対象をも共通感覚が自体的に感覚することになってしまう。何故なら、ディアレースの息子も三種の感覚対象のうちに含まれていたから、いずれかの感覚能力がそれによって作用を受けるべきであるとすれば、その感覚能力とは共通能力以外に考えられないからである。共通感覚と共通能力を同一視する後世の解釈は、共通対象とディアレースの息子型対象の区別をなくしてしまう。共通対象を感覚する共通感覚の働きは、実は共通能力の一つの機能に過ぎないのである。(43)

さて、共通感覚は共通対象を自体的に感覚するものとして措定されただけであるから、たとえば、視覚と触覚を通じて形が共通に感覚されると言われるとき、視覚と触覚は根元で一つに結合しているという予想は立てられても、五感が相互協力していることは未だ明らかではない。というのは、視覚によって付帯的に感覚された形を現実的に感覚するのが共通感覚の役割であり、また別の機会に触覚によって付帯的に感覚された形を現実化せしめるのが共通感覚の役目ではあっても、それぞれ感覚された形が同一であるという保証は何もないからである。アリストテレスは、形が視覚と触覚を通じて共通に感覚されると語っているから、感覚対象それ自体の現実態においてある形は同一のものだとは言えても、視覚を通じて生じた感覚の現実態においてある形と、触覚を通じて生じた感覚の現実態においてある形とが同一であるとは一言も語っていない。アリストテレスは、パークレーと違って見られた形と触れられた形とが感覚内容として同一でないことを洞察し得なかったとハムリンやブロックは断罪するが、その根拠(44)

は全くない。むしろ以下のように、見られた形は、触れられた形とは独立に視覚を通じて感覚され、その後に触覚を通じて触れられた形と遭遇し、比較されるように語られているのである。

たとえば運動のような、共通対象の如何なるものについても固有感覚はあり得ない。何故なら、もし共通対象を固有な仕方でもって感覚する第六の固有感覚があると仮定したならば、いわば視覚が味を感覚するような仕方でもって、視覚が形を感覚することになってしまうだろうとアリストテレスは述べる(425 a 21-22)。しかし形と色とは、色と味以上に密接な関係にある。即ち、両者は相互に随伴する ($\tau\acute{o}$ ἀκολουθεῖν ἀλλήλοις, 425 b 8) ⁽⁴⁵⁾ ものである。従ってもし固有対象と共通対象が相互に随伴するのであるなら、色の感覚には形の感覚が、また逆に形の感覚には色の感覚が必然的に伴うだろう。色の感覚(視覚)と形の感覚(共通感覚)が随伴関係にあるのに対して、視覚が味を付带的に感覚するためには、共通感覚以上の感覚、即ち五感が一なるものへと総合された統一的共通能力の働きを俟たなければならない。そこでアリストテレスは、視覚によって甘さを我々が感覚するためには、たとえば「白」という視覚と「甘」という味覚の両方を持っていて、その二つの感覚が両者の結合点で同時遭遇した際、その両者が形成した一なる感覚によって、我々は「甘」と「白」を同時に認識すると語るのである(425 a 30-b 2)。この立言は、形、大きさなどを自体的に把捉する共通感覚の働きから一歩進んだ共通能力の機能を示唆するものに他ならない。ここでは、固有感覚が各々独立して機能するのではなく、協力連繫するのであり、その際固有感覚はそれ自身としての限りではなく、他の一なる感覚としての限り、相互の固有感覚対象を付带的に感覚することになる。それは、同じものについて、たとえば胆汁について「黄色」且つ「苦い」という感覚が同時に生ずるとき、味覚によって黄色が、視覚によって苦さが付带的に感覚されると言われるような場合である(425 a 30-b 2)。ここで新たに告げられた付帯性は、共通対象が固有感覚によって付随的に感覚され

ると語られた付帯性とも、ディアレースの息子型の付帯性とも明らかに異なるのであって、むしろ両者の中間に位する付帯性だと見做してよい。

さて以上から、1) 共通対象が、固有感覚にとって付随的であるという意味での第一次付帯性、2) 固有対象が、種を異にする固有感覚にとって付带的であるという意味での第二次付帯性、3) ディアレースの息子型対象が、固有感覚にとっても共通感覚にとっても付带的であるという意味での第三次付帯性があることになるだろう。感覚の「付帯性」に以上の三段階が区分可能であることは、以下のΓ1の議論から明白である。それはまず第一に、もし共通対象を感覚する第六の固有感覚が存在したならば、視覚にとって形は第二次付帯性の地位に転落してしまう。しかるに実際は、形は色に付随する密接な関係にあるのだから、形は視覚にとって第一次付帯性でなければならない。従って、帰謬法によって共通対象には第六の固有感覚が在り得ないという論証である。そして第二に、共通対象に対して専属の固有感覚は存在し得ないが故に、共通対象は五感によって付带的にしか感覚されないということが確認されたとすれば、もしその際共通感覚を措定しない場合、共通対象は第三次付帯性の地位に転落し、ディアレースの息子型対象と区別がつかなくなるだろう。それ故、共通感覚を措定すべきだというのが、かの議論の筋道である。⁽⁴⁶⁾

我々は共通感覚という名称によって、それを一なる能力と見做して、見られた形と触れられた形とを同時に感覚すると考えるべきではなかろう。その種の感覚は第二次付带的感覚のレベルで成立するのであって、i) 視覚を経由し、色に付随して感覚された形だけを、共通感覚が自体的に感覚しているか、ii) 触覚経由で固さに付随して感覚された形だけを、共通感覚が感覚しているか、のいずれかである。それに対して、第二次付带的感覚の特徴は、二つ以上の異種の固有感覚が、両者の接点である共通能力において同時遭遇することによって、異種の固有感覚相互の感覚が付带的に成立するということである。

次に、第二次付帯性と第三次付帯性の相異は、第二の方は二つ以上の固有感覚が現実態において同時に成立している必要があるのに対し、第三次の方はただ一つの固有感覚の成立だけを前提にして、記憶が関与することにある。第二次付帯的感覚とは、たとえば色黒で、五ペーキュスほどの背丈で、太っていて、大声を出すなどという属性が同時に感覚され、これらの属性を担う基体 (e. g. ディアレースの息子) が把捉されるための契機となる感覚である。しかし、一度これらの属性を担うディアレースの息子という基体が把捉されたならば、それ以降は彼の特徴ある大声を聞いただけで、記憶によって、あの色黒い男だと認識できるだろう。これは第二次付帯性より一步進んだ第三次付帯的感覚の段階である。以下、アリストテレスがよく用いる、白く且つ甘いものという例を用いて単純化して説明してみよう。

第二次付帯性は、「白」と「甘」が同時遭遇するとき、その時に限って同時に ($\alpha\mu\alpha$, a 24) 白い (もの) が甘く、甘い (もの) が白く付帯的に感覚されるのであり、また胆汁について「黄色」且つ「苦い」という感覚が同時に ($\alpha\mu\alpha$, b 1) 成立するとき、黄色い (もの) が苦く、苦い (もの) が黄色いと付帯的に感覚されるということである。第二次付帯性では、二つ以上の固有感覚の同時性が強調されているのであって、ロスのように白いものを記憶によって甘いと付帯的に感覚するのだと解するならば、第三次付帯性との区別がつかなくなってしまう。⁽⁴⁷⁾ 第二次のそれでは、記憶と係りなく「その白いものは甘い」と視覚が付帯的に感覚する際、主語の「白」も述語の「甘」も現実態において同時に感覚されている必要がある。それに対して第三次付帯性では、主語項に当る「白」だけが現に感覚されていれば充分であって、過去に記憶された「甘」が記憶力の共働を前提として、共通能力によって「白」の述語として帰属結合されることによって成立すると考えられる。ただし第三次付帯的感覚が成立するためには、過去に第二次付帯的感覚が生じてしまっていて、「白」と「甘」が同時に帰属する基体

が把捉されていなければなるまい。というのも「白」が記憶によって「甘」と結合されるなら、「白」がたとえば砂糖（砂糖である限りの砂糖である必要はないが、属性を担う基体としての砂糖）だと捉えられていなければ、結合するすべもないからである (cf. 425 b 3-4).

III

B6で「ディアレースの息子」のタイプが三種の感覚対象の一つとして提示されていたのは、動物の本質である感覚的靈魂の定義を探究する土俵上でのことであったから、我々は第三次付带的感覚を人間以外の動物にも可能な知覚判断であると解するべきであろう。確かに知性を欠く犬や牛でも飼い主を識別し、ろばは飼い葉桶を識別するという事実があるが、飼い主及び飼い葉桶を識別するのは明らかに固有感覚でも共通感覚でもなく、第三次付带的感覚でなければならない⁽⁴⁸⁾だろう。斯く考えればアリストテレス自身の言葉で語られた他の例を我々は見出すことができる。「狼火を火であるが故に感覚し、共通感覚⁽⁴⁹⁾によってそれが動いているのを見て、敵だと認知する⁽⁵⁰⁾」(431 b 5-6)。また、或るものを臆病な人なら恐怖によって敵だと見做したり、恋に陥っている者なら恋の相手と見做すという Parva Naturalia の例も参考になる⁽⁵¹⁾。これらの例に採られている事物は、決して敵の敵たる本質とか、恋人の恋人たる本質を持つわけではなく、動物が有害なものや快を与えるものを知覚するのと同じ程度の属性を持つだけである。従って、この種の認識は対象についての或る種の評価と言うべきであろう。後世アヴィセンナやトマス・アキナスは、それを評価力 (vis aestimativa) と呼んでいる⁽⁵²⁾。トマスは次のように語っている。「雌羊が聴覚或いは視覚によって我が子を識別するような仕方で、非理性的動物においては本能的評価力⁽⁵³⁾によって個別的概念の把捉が生ずる。」「だが、評価力は或る個物を、それが或る共通本性の下に包摂されるものとしての限りで把捉するのではない。むしろ、単に或る能動或いは受動の、終局ないし

始源である限りにおいてそれを把捉する。ちょうど雌羊がこのものを子羊であると認識するのは、これが子羊である限りではなく、雌羊によって乳を授かるものとしての限りであるように、またあのものが草であると認識するのは、それが自らの食物である限りでのことであるようにである。それ故に、自らの能動或いは受動が関与しないような個物は、如何なる仕方においてもその本能的評価力によって把捉されることはない。というのも本能的評価力が動物に与えられているのは、それによって動物が固有の能動或いは受動に関して、一方を追求し、他方を忌避することによって、適格的に秩序づけられるためである⁽⁵⁴⁾。以上の如くトマスによつて的確に捉えられたように、第三次付帯的感覚は対象の本質を捉えることはなく、ただ動物の能動的行動ないしは受動的経験の、終局或いは始源としての限りで対象を捉えるのである。従つてこの種の感覚は、欲求及び追求・忌避の行動とほとんど同時的に生ずるであろう。アリストテレスが繰り返す、感覚があるところに快苦があり、快苦あるところに欲望と追求忌避があると主張する(413 b 23-24, 414 b 4-5, 431 a 9-10, 434 a 3)のも、とりわけ、この動物行動の前提条件となる第三次付帯的感覚を念頭に置いてのことと思われる。

さて以上から、第三次付帯的感覚は、ハムリン流のトリヴィアルな意味しか持たないどころか、動物の生死に関わるほど重要な不可決の能力であると断定できる。動物は白いものを我が子だと見て近づいたり、敵と見て逃走したり、餌と見て食べようとしたりするということのように、白いものを様々な行動の対象として付帯的に感覚する。動物が生を全うするためにこの種の付帯的感覚が不可決であることは、「自然は何も無駄につくらないし、必要なものを何もつくり残すことはない(423 b 21-22)」というアリストテレスの目的論から当然の要請だからである。

ところで、動物が感覚の固有対象を或る特定の事物として捉え、効率よく行動するためには、先天的動物本能に加えて、親による教授を必要とす

るであろうし、習慣 (ἔθης) が形成される必要もあるだろう。アリストテレスは、第三次付带的感覚が成立するに至る詳細なプロセスについて何も説明を加えていない。しかし、少なくともそれは、或るものについて各種の固有感覚、共通感覚が相補的に同時に働き、その諸属性を担う基体の把捉が完了していることを前提にして、或る固有対象を記憶によって或る特定の事物であると評価を下す知覚判断である、と結論づけて間違いないと思われる。

第三次付带的感覚について、以上の結論との関連で振り返って見るならば、「ディアレースの息子」或いは「クレオーンの息子 (425 a 25, 26, 26-27, 29)」という奇妙な表現に着目したキャッシュドラーの洞察はやはり正しいのではないかと思われる。⁽⁵⁵⁾ 彼によれば、通常アリストテレスが挙げる人名は、クレオーン、カリアスなど単純な固有名詞である。ところが、付带的感覚の場合には固有名を故意に避けた曖昧な表現になっている。⁽⁵⁶⁾ これは何を意味するのかと言え、付带的感覚のレベルは未だソクラテスそのものとかコリスコスそのものについての本質認識に至っていないのであるから、それは名指しによる同定なしに、漠然と当の対象を他のものから区別して認知している段階なのだというのである。もしそうであるなら、I 6 において知性による判断認識の例が「クレオーンは白い (430 b 5)」というように、「クレオーンの息子」ではなく「クレオーン」という端的な固有名が主題として使われていることは示唆的であると言えよう。

そして、我々自身の立場から補足すれば、「ディアレースの息子」とか「クレオーンの息子」という表現は、或る特定の色、匂い、温かさ (五感の対象)、形、大きさ、運動 (共通感覚の対象)、快なるもの、苦なるもの (評価力の対象) 等々の情報を担った集合体を意味するものに他ならないだろう。アリストテレスの思考法は、おそらく対象を異なる角度から次々に眺めてゆき、対象のそれぞれのアスペクトに相即した感覚能力を、そのアスペクトを自体的に感覚するものとして定義してゆく道であったと思われる。

る。即ち、固有対象を自体的に感覚するものとしての五感、共通対象を自体的に感覚するものとしての共通感覚、異種の固有対象を同時に感覚すると共に、更に対象の評価を自体的に司る共通能力が次々に措定される。しかし以上の道程に連なるものとして、更に対象の普遍的本質を自体的に捉える（白いものを見て人間だと感覚するが如き cf. 430 b 29-30）第四次付帯的感覚を要請することができるかもしれない⁽⁵⁷⁾。そうすることによって初めて、ディアレースの息子は全体として残りなく我々の諸認識能力によって、次々に相即した定規を当てがわれるかのように、搦め捕られ、「靈魂は或る意味で存在するものの全てである（431 b 21）」というアリストテレスの認識論的結論につながるができるであろう。

最後に Γ 1 の次の一節を引用して、アリストテレスの感覚論を存在論との関連で位置づけてみることにしよう。「命題は或るものについて或ることを述べる。それはまた否定命題も同様で、どんな命題も真或いは偽である⁽⁵⁸⁾。しかし、そうであるのは知性の活動の全てではない。否、本質という意味での「何であるか」を知る知性の活動は〔常に〕真であり、或るものについて或ることを述べるのではない。ちょうど見ることが、固有対象⁽⁵⁹⁾については真であるが、白いものが人間か否かについては常に真ではないように、質料なしにある限りのものどもについての知性の活動もそれと同様である（430 b 26-30）。」

ここでアリストテレスは、感覚の領域と知性の領域に平行関係を見出し、一方固有感覚と知的本質認識が単純で常に真であるのに対し、他方付帯的感覚と知的判断認識は、或るものについて或るものを述語づけているからには、常に真であり得ないと指摘している⁽⁶⁰⁾。ここから、付帯的感覚は知覚上の述定ないし判断と見做されていたことが確認できるが、それでは、知性レベルと感覚レベルの判断認識の相違は何処に求められるのだろうか。

アリストテレスが通常、本来的な述語づけと認めるのは「ソクラテスは

白い」とか「その木材は大きい」というように、実体について性質、分量などが述べられる場合であって、実体が主語の地位を占め、他のカテゴリーに属するものは常に実体に付帯する故に、述語の位置を占めることであつた。⁽⁶¹⁾ それに対して、付帯的感覚における述定関係はまさにその逆であつて、たとえば「白」のような属性が主語の地位を占める。「ソクラテスは白い」が本来的述定のタイプであるならば、付帯的感覚が語る「白いものはディアレースの息子だ」は、まさにアリストテレスが「付帯的述定」と呼んでいるタイプに他ならない。⁽⁶²⁾

だが、何故付帯的述定の方が *De Anima* の感覚論において、あたかも本来的述定であるかの如く現れているのであろうか。アリストテレスの基本的思考枠組の一つに、我々にとっての先・後と、本性上の先・後が逆であるという発想がある。⁽⁶³⁾ 我々にとって先なるものは感覚経験によって知られるものであるから、我々の認識過程はそのような「我々にとって一層可知的なもの」から「本性上一層可知的なものへ」と進むことにある。⁽⁶⁴⁾ *De Anima* の感覚論は、まさに本性上不明瞭なもの、雑然とした集団 (*τὰ συγκεχυμένα*)⁽⁶⁵⁾ たる感覚経験から、本性上一層可知的である本質形相の把握へと「下から上への道程」を描き上げたものとも言えよう。*Metaphysica* 及び *Analytica Posteriora* では、本性上の可知性に則って論述されているが故に、「ソクラテスは白い」というタイプが本来的述定であることは当然であつた。何故なら、白いものが存在する故に、それが人間ソクラテスであるのではなく、人間ソクラテスが存在する故に、それが白くあるからである。ところが、我々の認識にとって先のもの即ち感覚されるものは、まず「白」であつて、ここから出発して、我々にとってより後の、人間ソクラテスの認識へと我々は進まねばならない。*De Anima* の感覚論で付帯的述定のタイプが主役に抜擢されているのは、我々にとっての可知性の順序に従つて、固有感覚から出発して、共通感覚、共通能力を經由し、最後に本質形相が把握されるに至る認識の道程が「逆の存在論」を前提してい⁽⁶⁶⁾

るからである。

註

引用は全てベッカー版の頁数と行数で示す。 *De Anima* からの引用箇所は本文中に呈示し、書名を省略する。

- (1) A 1 (402 b 11-13) で既にこの探究方針は暗示されていた。
- (2) cf. *Metaphysica* Θ 8, 1049 b 12-17.
- (3) 視覚の対象として、色のほかに光 (418 b 11; *De Sensu et Sensibilibus*, 3. 439 a 18-19) 及び、きのこ、つの、魚の頭や鱗や目など火のように見えて輝くもの (419 a 3-5, cf. 418 a 27-23) が挙げられているが、これらは全て色をも含めて「透明なもの ($\tau\acute{o}$ διαφανές)」に帰着される (*De Sensu*, 3 参照)。また五感は、視覚にとっての闇の如く、それぞれの固有対象の欠如 ($\sigma\acute{\epsilon}\rho\eta\sigma\iota\varsigma$) をも感覚する (421 b 3-6, 422 a 20-30, 425 b 20-22)。なお触覚対象から触覚を定義することの困難さについては、R. Sorabji, *Aristotle on Demarcating the Five Senses*, *Articles on Aristotle* 4, Duckworth, 1979, p. 85 参照。
- (4) 418 a 10-11, 19 では、共通対象は五感全てによって感覚されなければならないとされている印象を受けるが、最小限度視覚と触覚によって感覚されるものと解すべきであろう (*De Sensu*. 1. 437 a 5-9; 4. 442 b 7, 13; *Met.* A 1. 980 a 26-27)。共通対象のリストには、更に「一」(425 a 16), 「きめの粗さと滑らかさ」, 「物体における鋭さと鈍さ」が後に追加されている (*De Sensu*. 4. 442 b 5-8, cf. *Categoriae*, 8. 10 a 16-24)。なお「時間」はロス、タイラーに反して共通対象のリストには加えない。cf. C. Kahn, *Sensation and Consciousness in Aristotle's Psychology*, *Articles on Aristotle* 4, p. 8, n 23.
- (5) W. S. Hett, *On the Soul*, Loeb Classical Library, 1936, pp. 701, 703; I. Block, *Aristotle and the Physical Object*, *Philosophy and Phenomenological Research* 21 (以下 Block [1]), 1961, p. 44; R. D. Hicks, *Aristotle De Anima*, Arno, 1907, p. 75.
- (6) D. W. Hamlyn, *Aristotle's De Anima Book II and III*, Oxford 1965, p. 105; *Aristotle's Account of Aesthesis in the De Anima*, *Classical Quarterly*, 1959, p. 13; S. Cashdollar, *Aristotle's Account of Incidental Perception*, *Phronesis*, 1973, p. 157; cf. A. Graeser, *On Aristotle's*

framework of sensibilia, *Aristotle on Mind and the Senses*, Cambridge U. P., 1978, p. 94 n 11.

(7) *Met.* Δ 18, 1022 a 27-29.

(8) 或るものの「何であるか」(本質)を明らかにする定義的な「自体的なもの」には二種類のものがあることが *Analytica Posteriora* で述べられている。「自体的なものである」のは、(1)「何であるか」のうちに含まれるものである。たとえば「線」は三角形に(含まれて)あり、「点」は「線」に(含まれて)ある。何故ならそれら(三角形や線)の本質はこれら(線や点)から構成され、これらはそれらの「何であるか」を語る定義のうちに含まれるからである。また、(2)それら(基体)に(述語として)あるもののうち、それら(基体)自体がこれら(述語)の「何であるか」を語る定義のうちに含まれるところの(これらの)ものである。たとえば「直と曲」は線に(述語として)あり、「奇と偶」は数に(述語として)ある……そして一方「線」、他方「数」はこれら全ての「何であるか」を語る定義のうちに含まれる(73 a 34-b 3)。ハムリン(*op. cit.*, p. 105)がこの二種類の自体性が共に、感覚と感覚対象の場合に当てはまると主張するのは理解し難い。何故なら感覚のように、相関者を本質のうちに含む、関係的なものの本質は(2)の種類に該当すべきものだからである。cf. *Cat.* 7. 6 a 36-b 3; *Met.* Δ 15, 1021 a 31-b 2.

(9) Hamlyn, *op. cit.*, p. 105; art. cit., p. 13; Sorabji, art. cit., p. 76, n 2.

(10) *Met.* Δ 15, 1021 a 26-30.

(11) cf. *Cat.* 7, 7 b 23-8 a 12. *Met.* I 卷 6 章における逆の関係づけについては、牛田徳子「アリストテレスにおける関係概念」、慶応義塾大学言語文化研究所紀要第 16 号, 1984, pp. 61-63 参照。

(12) Hicks, *op. cit.*, p. 366, on a 29. *Met.* Δ 18 の分類で言えば、この自体性はそこで第三に挙げられている、属性と第一の基体の関係に当てはまる(1022 a 30-31, cf. a 16-17).

(13) グレーザー及びドゥ・コルトの解釈は採らない。Graeser, art. cit., p. 71; Marcel De Corte, Notes exégétiques sur la théorie aristotélicienne du sensus communis, *The New Scholasticism*, 1932, p. 190.

(14) τὸ λευκόν という表現は「白」というような形相だけを指すことも、「白いもの」というようにその形相が内属する基体を指すことも可能である(cf. *Met.* Z 6. 1031 b 23-26)。視覚に固有な対象としては「白」と訳す方が正確であるが、後述の第一感覚能力による存在措定機能によって「白いもの」と訳すことも可能になる。この点に関するアリストテレスの無頓着な態度に

- については、425 b 18-19 参照。cf. Block [1], pp. 95-99.
- (15) W. D. Ross, *Aristotle De Anima*, Oxford, 1961, pp. 238-239; Themistius, *In De Anima Paraphrasis, Commentaria in Aristotelem Graeca*, Berlin, 58. 9-11 並びに apparatus criticus 参照。またシンプリキオスも同解釈と思われる。Simplicius, *In De Anima Commentaria*, 128. 1-2.
- (16) Hamlyn, *op. cit.*, p. 107; Graeser, art. cit., pp. 72-73.
- (17) Cashdollar, art. cit., p. 160, n 11.
- (18) Graeser, art. cit., p. 73.
- (19) a 23 に「付帶的に」という副詞句を補って読む読み方は、ロス、ハムリン、キャッシュドラー、グレーザーの論争より半世紀以上も前に、ヒックス (*op. cit.*, p. 363 on a 23) によって正しく提案されていた。
- (20) 同様の省略の例として 425 a 21-22 を参照。
- (21) Hamlyn, *op. cit.*, p. 107.
- (22) *Ibid.*; Cashdollar, art. cit., p. 158.
- (23) Cashdollar, art. cit., p. 159.
- (24) cf. Simplicius, *op. cit.*, 126. 21-22; Philoponus, *In de Anima Commentaria*, 310. 33-35. ただしピロポノス (317. 25-32) に限っては、もし彼が付帶的感覚対象即実体と即断しなかったならば、後述の我々の解釈に近いところに来ていたと言うべきであろう。
- (25) それでは、何故ディアレースの息子型対象は共通能力 (第 II, III 節参照) によって自体的に感覚されるのに、B 6 ではこれだけが付帶的感覚対象とされたのであろうかと人は問うであろう。それは固有対象と共通対象の密接不可分性 (425 b 8-9) を考慮してのことか (cf. Graeser, art. cit., pp. 77-81), それともまた B 6 では外的感覚にとって対象が自体的か付帶的かということが、問われていたからだと言えるかもしれない。後者の場合、外的感覚と内的感覚の境界線は、共通感覚と共通能力の間に引かれるべきであろう。
- (26) cf. Thomas Aquinas, *In De Anima Commentaria*, Marietti, Lib. II, Lect. XIII, n 395: si enim accideret sensibili, quod lateret sentientem, non deceretur per accidens sentiri.
- (27) Hicks, *op. cit.*, p. 426 on a 15; Thomas, *op. cit.*, Lib. III, Lect. I.
- (28) Sophonias, *In De Anima Paraphrasis*, 108. 8-10; Themistius, *op. cit.*, 81. 28-30; 82. 18-21; Simplicius, *op. cit.*, 183. 1-3; Philoponus, *op. cit.*, 457. 16-22; W. Theiler, *Aristoteles Über die Seele*, Berlin, 1983, S. 131; Kahn, art. cit., p. 9, n 24; S. R. L. Clark, *Aristotle's Man*, Clarendon

- P., 1975, p. 71, G. Rodier, *Traité de l'âme*, Vrin, 1900, p. 353.
- (29) Hicks, *op. cit.*, pp. 426-427; De Corte, art. cit., pp. 189-191; Ross, *op. cit.*, pp. 269-270; Hamlyn, *op. cit.*, p. 117; Graeser, art. cit., p. 81; cf. *Physica* 195 b 1-2; ἔστι δὲ καὶ τῶν συμβεβηκότων ἄλλα ἄλλων πορρώτερον καὶ ἐγγύτερον.
- (30) Graeser, art. cit., p. 81.
- (31) 428 b 19 では「常に真」という厳格さが弱められ、「最小限に虚偽性を持つ」との留保が加えられている。何故アリストテレスが多少なりとも固有感覚に偽を認めたのかという疑問について、ハムリンとブロックが返答しているが、我々はハムリン案を退けブロック案を受け入れる。Hamlyn *op. cit.*, p. 106; art. cit., p. 12; *Sensation and Perception*, London, 1961, pp. 26-27; I. Block, Truth and Error in Aristotle's Theory of Sense Perception (以下ブロック [2]), *Philosophical Quarterly*, 1961, p. 7.
- (32) ブロック ([2], p. 6) は固有対象についてだけ 418 a 24-25 を典拠にして目的論的理由を挙げている。しかし自然は固有対象のみならず、共通対象の感覚についても充分配慮していると言うべきだろう (cf. 425 b 5-7)。従って我々は、対象の内在的性格に基づいて真偽論を論ずることにしたい。またハムリン (art. cit., p. 15) は、我々とは異なった角度から共通対象についての錯誤の原因を示唆し、クラーク (*op. cit.*, pp. 75-76) はハムリン説を発展させている。
- (33) cf. *Cat.* 8. 9 a 28-b 7.
- (34) *Cat.* 8. 10 b 12-13; *De Sensu.* 6. 445 b 28.
- (35) *De Sensu.* 4. 442 b 17-19.
- (36) *De Sensu.* 3. 440 b 23-25. *De Sensu.* 4章 (442 a 17-25) において、両極にある白と黒、或いは甘さと苦さの混合から、その混合比の割合に応じて諸々の色や味が生ずると説明される。混合の結果生じた色ないし味の種は7つであるとアリストテレスは語るが、列挙されている数を整合的に数えるならば、実際には6つないし8つになる。たとえば色は、白、(黄)、深紅、紫、緑、青、(灰色)、黒の種、味は、甘さ、(油っこさ)、酸っぱさ、辛さ、渋さ、酷しさ、(塩辛さ)、苦さの種に限られる。
- (37) *De Sensu.* 4. 442 b 19-21; *Cat.* 6. 5 b 11-14.
- (38) cf. *De Sensu.* 4. 442. b 21: ἀπειρών ὄντων τῶν σχημάτων……
- (39) *De Sensu.* 7. 439 a 10, 19-20; *De Somno et Vigilia*, 1. 445 b 10.
- (40) *De Memoria et Reminiscentia*, 1. 450 a 13, 16; 451 a 18; *De Somno.*

1. 454 a 23-24.
- (41) *De Somno*. 2. 246 a 5-6; *De Insomniis*, 3. 461 a 6-7, 13, b 4; *De Longitudine et Brevitate Vitae*, 1. 467 b 28.
- (42) *De Somno*. 2. 445 a 15-16.
- (43) *Parva Naturalia* では結局、感覚能力は一つであり、これによって全てのものが感覚されると明言される (*De Sensu*. 7. 449 a 17-18; *De Somno*. 2. 455 a 20). そこから五感も共通感覚も共通能力 (動物の本質規定としての感覚的靈魂) の一機能に過ぎないことが窺えるが、それでも共通能力の諸機能のレベル分けとして *De Anima* の分析は有効であると思われる。
- (44) Hamlyn, *Koine Aesthesis*, *The Monist*, 1968, pp. 176-179; Block, *On the Commonness of the Common Sensibles*, *Australasian Journal of Philology* 43, 1965, pp. 189-195.
- (45) cf. 425 b 5; *De Sensu*. 3. 439 b 11-12; 6. 445 b 10-11; Graeser, art. cit., p. 80.
- (46) 425 a 24 の *εἰ δὲ μὴ* を我々は、共通対象についての第六の固有感覚を措定した場合の、a 21-22 の第一の反事実的仮定に加えての、第二の反事実的仮定とはしない。むしろ a 24-25 は「さもなくば、我々は視覚によって甘さを、まさに次のような仕方ですら付帯的に感覚することになってしまう」の如く、“第一の”反事実的仮定内での仮定と取るべきである。そうすれば、a 28-29 が a 24-27 の奇妙な反復に過ぎないのではないかというグレーザー (art. cit., p. 96, n 31) の懸念は消える。また我々は、a 29 の *ὡπερ εἴρηται* を a 21-22 と a 24-27 の両方を指示しているとして、*τὸν Κλέωνος υἱὸν ἡμᾶς ὄραν* を削除する案は採らない。a 28 の *γὰρ* は直前の *οὐκ ἄρ' ἐστὶν ἰδία* の理由句ではなく、*τῶν δὲ κοινῶν ἤδη ἔχομεν αἰσθῆσιν κοινὴν οὐ κατὰ συμβεβηκός* の理由句と解すればよい。この *γὰρ* の係り方を見抜けなかった故に、タイラー (*op. cit.*, S. 50, 131) は a 24-25 を正しく翻訳しつつも、グレーザーと同じ懸念を a 24-25 について抱いていたと思われる!
- (47) Ross, *op. cit.*, p. 271.
- (48) ピロポノス (*op. cit.*, 317. 28-29) とソポニ阿斯 (*op. cit.*, 72. 15-16) の例を転用した。
- (49) b 5 の *τῇ κοινῇ* をそのまま読み、トルストリック提案の *τῇ κινήσει* は採らない。もし *τῇ κοινῇ* を b 6 の *γνωρίζει* にかけて読むならば、*τῇ κοινῇ* を共通能力 (*κοινὴ δύναμις*) の意に取るべきで、共通感覚 (*κοινὴ αἰσθησις*) の意に取るべきではない。しかるに「共通能力」なる語は *De Anima* に一度

も現れていない故、 $\tau\eta\ \kappa\omicron\iota\nu\eta$ は共通感覚と解し、 $\delta\rho\omega\nu\ \kappa\iota\nu\acute{o}\mu\epsilon\nu\omicron\nu$ にかけるなければならない。

- (50) 「感覚する」ではなく「認知する ($\gamma\nu\omega\rho\iota\zeta\epsilon\iota$)」と記されているから、この例は感覚に属さないのではないかという反論が予想されるが、アリストテレスは $\gamma\nu\omega\rho\iota\zeta\epsilon\iota\nu$ を感覚の場合にも用いる。cf. *De Sensu*. 4. 442 b1; *Met.* A 1. 980 a 26-27.
- (51) *De Insom.* 2. 460 b 3-7.
- (52) Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, 1, Q. 78, a. 4, corpus et ad 4; Q. 81, a. 3, corpus et ad 2; *Quaestio Disputata De Anima*, a. 13, corpus. アヴィセンナについては、Noriko Ushida, *Étude Comparative de la Psychologie d'Aristotele, d'Avicenne et de St. Thomas d'Aquin*, 1968, pp. 158-159 参照。
- (53) Thomas, *In De Anima Comm.* Lib. II, Lect. XIII, n 397.
- (54) *Ibid.*, n 398.
- (55) Cashdollar, art. cit., pp. 167-168.
- (56) 428 b 21-22 でも「その白いものが、これであるかそれとも他のものであるか ($\tau\omicron\upsilon\tau\omicron\ \eta\ \acute{\alpha}\lambda\lambda\omicron\ \tau\iota$)」というように漠然とした言い方がなされている。
- (57) トマスは、或るものを共通本性の下に包摂されるものとして把握する能力を *vis cogitativa* に帰している。この能力の考察は、実践的三段論法として定式化される行為論、及び知性による個物認識の問題を含む大がかりなものとなるので、稿を改めて論じたい。cf. *Anal. Post.* B 19. 100 a 17-18; 429 b 13, 16-18; *De Sensu*. 1. 436 b 12-437 a 1, 5, 12-16; *Met.* A 1. 980 b 22-25, M 10. 1087 a 19-21; *Ethica Nicomachea*. Z 7. 1141 b 14-21, Z 8, 1142 a 26-30, Z 11. 1143 b 2-5, H 3. 1147 a 29, 33; Thomas, *Quaestiones Disputatae De Veritate* Q. 10, a. 5, corpus; *S. T.* 1, Q. 78, a. 4, corpus et ad 2; *Q. Disp. De Anima*, a. 13, corpus; *In De Anima Comm.* Lib. II, Lect. XIII, n 396-398.
- (58) b 27 の $\kappa\alpha\tau\acute{\alpha}\phi\alpha\sigma\iota\varsigma$ はトルストリックの提案に従ったロスと同様、 $\acute{\alpha}\pi\acute{o}\phi\alpha\sigma\iota\varsigma$ と読み換える。もともとキャッシュドラー (art. cit., p.161, n 12) の指摘通り、 $\kappa\alpha\tau\acute{\alpha}\phi\alpha\sigma\iota\varsigma$ と読んでも本論の論旨には一向に影響しない。
- (59) ロスのように $\tau\omicron\upsilon\delta\ \lambda\epsilon\upsilon\kappa\omicron\upsilon$ と読まず、写本通り $\tau\omicron\upsilon\delta\ \iota\delta\iota\omicron\upsilon$ と読む。
- (60) Cashdollar, art. cit., p. 161.
- (61) *Anal. Post.* A 22. 83 a 1-14.
- (62) *Analytica Priora*, A 27. 43 a 32-36; *Anal. Post.* A 19. 81 b 25-26, A 22.

83 a 16-17; *Met.* Z 4. 1029 b 29-33; Graeser, art. cit., pp. 74-75; Cashdollar, art. cit., p. 168, n 24.

- (63) *Anal. Post.*, A 2. 72 a 1-5; *Met.*, A 2. 982 a 23-25, Δ 11. 1018 b 30-32.
- (64) *Met.* Z 3. 1029 b 3-5; *Phys.* A 1. 184 a 16-21.
- (65) *Phys.* A 1. 184 a 21-22.
- (66) 「逆の存在論」という呼称はグレーザー (art. cit., p. 74) に依った。